

# 三河アララギ

平成二十二年

十一月号

第五十七卷 第十一号



ニューヨーク日記(49) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

August 4, 2010 : Jimmy Choo is calling

## Blue Shoe Diaries



ShoeLady大好きなジミーチューでチャリティーイベントをホーストしました！来た人達皆目をキラキラさせながら色々な靴買ってたよ。チャリティーはハイチの子供達のためのチャリティー。来てくれたお客さん達には特別作ったグディーバッグをあげました。簡単に言ったら大人の福袋！私子供の頃(から)お楽しみ袋大好きだったのよね～今回は色々なコスメグッズやスパでの割引などなどNYで働く女性に喜ばれる福袋になりました。

ShoeLady's temple called (it's Jimmy Choo) and asked her to host a shoe charity event. So here we are, raising money for kids in Haiti. And it was quite a sight seeing NY women with sparkly eyes trying on and buying Choos. Add some bubbly and hors d'oeuvres and you better get out of their way when they spot a beautiful shoe. The event ended a success with guests who came and shopped receiving a Choo goodie bag filled cosmetics and discounts to luxurious spas.

# 目次

## 第五十七卷第十一号(通卷六八三号)

表紙(大豆) 今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(49)

感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓より」(四)

歌集二本の木

影法師

ありやなしや

命

剽軽な夫

米寿を迎へた

「おかいこ様」

苦勞かけた

ふる里の夏

むかご飯

蝦蟇

「空気の精」

白米棚田

猛暑日

仲よし

山ゆり

今年の名月

町歩き

ひとつ消えゆく

鶏頭

炎となりて

「みちらしい」

(一)

Blue Shoe(二)

杉浦 弘(五)

岡本八千代(六)

白井 久吉(七)

今泉 由利(八)

伊藤八重子(九)

青木 玉枝(十)

弓谷 久子(一一)

北川 宏廸(一二)

林 伊佐子(一三)

内藤 志げ(一四)

胃甲 節子(一五)

安藤 和代(一六)

佐々木利幸(一七)

近藤 映子(一八)

半田うめ子(一九)

清澤 範子(二〇)

金津 文枝(二一)

伊与田広子(二二)

杉浦恵美子(二三)

堀川 勝子(二四)

平松 裕子(二五)

小野可南子(二六)

芽生え

片男波

上昇気流

スモッグ

私の一首

贈呈誌

ことよせ

和歌から派生した季語の本意(その四)

俳句

物理学者と詩歌の世界(10)

鎌田敬止という人(四十七)

萬葉一葉(322)

「水魚」のことから(118)

ことのはスケッチ(383)

和菓子街道(49)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

山口千恵子(二七)

夏目 勝弘(二八)

秋山 逸穂(二九)

井村 喬泉(二九)

半田うめ子(三〇)

平松 裕子

堀川 勝子

いーはとぶ(三二)

鈴木つや子(三二)

白井 信昭(三二)

伊藤 忠男(三二)

佐藤 喜仙(三三)

植村 公女(三四)

一石(三四)

佐藤 喜仙(三五)

皓一(三五)

一石(三六)

鮫島 満(三八)

今泉 忠芳(四〇)

岡本八千代(四一)

今泉 由利(四二)

平松 温子(四三)

和菓子街道(49)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

## 感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

白き足袋つくらふ妻がたまゆらに何にとりあぐる列車時刻表

P  
147

いづち向きて乗るとも駅へゆくバスを待ちをり昏るる街のはづれに

P  
148

歌集 一本の木

杉浦 弘

鴉

洲の上に遊ぶ群よりはなれゆきなぎさに水を飲む鴉あり

暑さ厳しき今日のひと日と石鹼を泡立てながら胸洗ひをり

土曜の午后の生物室に立ち寄りてメタセコイヤの苗をもらひぬ

## 影法師

蒲郡 岡本八千代

月の夜のさ庭歩みて書屋にゆくわが影法師の淡きあはれさ

秋暑くやうやう過ぎつつわが夏の白き帽子を洗ひ干しけり

時々の足腰の痛み忘れはてチョコ色ハイカラの紐靴買はむ

チョコレート色この靴履きて松山へ老いの一人旅するかもしれない

靴買ひてどこかほのぼのとしてきたり誰にも優しくならねばの思ひ

母としてやさしき心もちたけれ月充ちて光るこの夜にこそ

われに届く月の光の中にして思ひは愉しはかなけれども

合歡の木のネムの枝葉も眠りたり夜の大空に高くそのまま

群雲に月影出でたり隠れたりそを茫然と仰ぎゐるわれ

群雲にある時月影淡くなりある時静けく白光<sup>しろ</sup>りつつ

## ありやなしや

新城 白井久吉

われよりもわが子らよりも背の高き孫と並びて背筋を伸ばす

蛙の子オタマジヤクシをモロンゴといふ方言を作手にて知る

帰りなば凶鑑によりて確かめむ竹に雌雄のありやなしやを

願ひごと叶へ下さる神仏かみほとけあるやも知れずなしとも言へず

炭坑に働く人の履きたれば地下足袋といふ名の起これりと

渴きたる喉をうるほす思ひにて萎えたる鉢の花に水やる

歌手の名はおろか歌さへ知らずともわれの生活に係はりはなし

蒲茂り小ブナの遊ぶ溜池の無くなることもなりゆきにして

やうやくに秋の来るを告げることわが庭隅のモクセイ匂ふ

旗頭山といふ名は残れども山は削られ見るかげもなし

## 命

東京 今 泉 由 利

満月のいづる辺りかほのほのと白みきたりぬしばし待ち待つ

墨と水と無彩たゆたひ出来あがる私好みのスモークグレイ

アンドレスの山の化石のコーラルピンク太古の海に起りしことを

海を越え運ばれきたるウルトラマリン蛇の髭の實の瑠璃色を塗り

右肩に十月余りの月ありき月明り消しプレイボール

東京の大き星空求め来ぬ夜を隠するナイター照明

天上にこと座のベガの見ゆるはず皓皓としてナイター照明

雨脚の時折強し夕まぐれ目的のあり目的に出ず

電線の細細き影伝ひゆく秋となりゆく命のままに

ふつふつと沸騰たかしマグに注ぐ家にしあれば伊勢の御塩湯

## 剽軽な夫

豊川 伊藤八重子

壁掛けの鏡の位置が高くなり背伸びし覗けば頬皺目立つ

百寿といふ女性の詩集『くじけないで』娘が差し出だす敬老の日に

起き出でて立ちたる庭に地の熱ほてり未だ残れる秋の入彼岸

是といふものは一つも無けれども夫と子の在り私がある

季くれば正しく咲き出づ彼岸花遅れて咲かず子は草刈るを待つ

わが庭に海の匂ひのたちくると実家さと帰りの娘懐しみ立つ

徳利とっくりに挿して鮮やか曼珠沙華けさ裏庭に折りし二花

軒下に払ひしわが爪匂ふらし右往左往し黒蟻寄りくる

ケアマネジャーに百歳生きると誉められて手足動かす剽軽ひよしきんな夫

晩夏おその庭に咲き継ぐ朝顔の小さき白花たっぷり水遣る

## 米寿を迎へた

伊丹 青木玉枝

コスモスの花野駆けゆく幼児の小さき帽子をパラソルが追う  
秋くれば部屋の模様替へ少しづつ変へるも楽し独り居なれば

梅雨明けが分からぬままに秋になりそれでも稲は黄金に波打つ

晴れる日も雨となる日も大切なひと日と思ふ老いしこの頃

荒草は夜来の雨を露として秋の彼岸入りわづかに涼し

点滴のポトリポトリとわが腕に束の間の安らぎ目をとじて

親と子の絆忘れし今の世は誌上に心の痛む日々なり

「たまちゃん」と米寿を迎へた吾れを呼ぶ声も嬉しや故里の駅

もう一度畳に正座してみたい叶はぬ夢と知りつつ椅子に

秋空は青く澄みつつ誕生日米寿迎へてよくぞ生き来し

## おかいこ様

豊川 弓 谷 久 子

昨日より今日今日より明日へと暑さ増す葉月長月と移り行けども

おかいこ様の言葉懐かしさわさわと桑食む音のよみがえり来る

住みつきし青雨蛙さしのべし我が指先によじのぼり来る

身籠りの夏の辛さを年毎に母は語りき我が誕生日

記念写真の最前列に正座する我に九度目の今日敬老会

畦道に今年は彼岸花まだ咲かず墓へと向ふ彼岸の入り日

つつがなく生きてますよと墓の前夫逝きてよりはや十五年

子の大声に出でし我が目にくつきりと予報外れの中秋の月

突然に終りし真夏よ待ちかねし秋と思へどウロウロとゐる

父のみの知るまつたけの群生地誰にも言はず逝きてしまひき

## 苦勞かけた

東京 北川 宏 廼

墓石はかいしとなりたる雅子すすぎつつ今年の猛暑を伝へて帰る

丑三つどきジーと一声蝉が鳴く誕生の声か最後の声か

鳴く場所を気にかけてぬのか油蟬なぜコンクリートの電柱選ぶ

久々の雨に濡れゆくアスファルト雨のこの音こちよきかな

沈みきるまでの太陽見届けてベランダの木に水を注げる

冷蔵庫開けて首まで突込みぬポカリスウェット今日二本目よ

激辛のカレーのやうな夏なれば松茸ごはんが早く食ひたい

欠かさずに「ゲゲゲの女房」みる妻に苦勞かけたとつくづく思ふ

化粧とは自分の主張といふよりも自分の弁護よわが妻はいふ

綿パンの黒き汚れはワイキキの鉄棧橋に掛けたるしるし

## ふる里の夏

岡崎 林 伊 佐 子

放置せる広き畑の草刈りに夫と励みぬふる里の夏

畑仕事終へて手洗ふポットの水あつくなりをり今日も猛暑か

幾日も雨降らぬまま猛暑日の記録更新いつまで続く

山猿も進化したるかこの年は稲の穂食むと村人なげく

農仕事のおほかたは老いら果しをり畑を守る姿に和む

村人に米六俵を購ひて猛暑つづきの苦労おもへり

出産の喜びもなく突発に聴覚失せし思い出の日記

泣き顔の吾に笑顔で乳を飲む長男の姿に生を救はる

さまざまな苦難のり越へながらひていま歌を詠む幸せがある

子供らのしらぬ悲しみ捨てむとぞ風呂焚きにする古き日記を

## むかごの飯

豊川 内藤 志げ

葱畑に水の匂ふかひらひらと烏揚羽の最初の一羽

打ち水の土に降り来て黒揚羽頻りに羽根を振はせ止るとどまる

株元に古布被せ日除とすゴーヤの萎れに少しの助け

畑畦に見詰めゐたりし飛行機を汗を拭ふ間に見失いたり

往復に三十分の当古の畑朝な夕なに水かくる夫

自生なる瓜を黒瓜と決め培ひぬ次第に黄瓜の形となりゆく

友よりのむかごの飯を頂きぬむかごの麦飯塩味もよく

市場に賣れぬ葱を持ちてゆきむかごの飯を頂き帰る

入院の二十日の後に逝きませり心の準備嫁は出来ざり

喪服のままわれらの食器を洗ひ始む嫁の背中に言葉は出せず

## 蝦 蟄

豊橋 胃 甲 節 子

酷とゆふ程に残暑の厳しき日白き雨蛙が椿の葉に動かず

雨戸引く裏庭に大きき蝦蟄微動だにせず黒き目見開く

三ヶ月に互りて散歩にさへ出でず涼風立つ日をひたに待ちをり

酔芙蓉の蕾ふくらむ一日毎待ち待ちてをり優しき色を

友よりの手紙と荷物届きたり故郷道後の湯の花添へて

畑作の友は恵みの今日の雨如何ばかり喜びるまさむ事かと

中天に仰ぐ名月冴へ渡る深き祈りに手を合はせ佇つ

鈴生りの銀杏の淡きみどり色銀杏並木をゆく度見上ぐ

久し振りの雨は涼しき風呼びて昨日の暑さをいつしか忘るる

籠りゐて吾が視野狭き明け昏れを中秋の名月静かに照らす

## 「空気の精」

豊川 安藤 和代

そつと手で触れたき様な夏の雲本宮山をやさしく抱く

思ふままに南瓜の蔓は地を這ひて先に小さく実を結びをり

こほろぎは前後左右に飛び急ぐ南瓜の蔓を片付けゆけば

魔除けとふ父の植ゑたる柊は草抜く吾の手足に痛く

稲の穂の垂れゐる重さ日び増して二百十日の空はおだやか

「空気の精」幾度も曲練習し孫は堂堂ステージに立つ

満室の拍手の中に弾き終へて緊張とける孫を抱きしむ

どの孫も個室はあるに亡き母のベッドに眠る重なり合ひて

母の事口には出さぬ孫達よ夢なりと見よ母に抱かるを

犬ないて鳥が啼ひて夕迫るその一瞬がなぜか淋しく

## 白米棚田

豊橋 佐々木利幸

両膝が疼痛する今朝はゆたゆたと白米棚田の撮影に出る  
家持が巡視に歩みたる道なりと我は思ひたり七尾街道は  
二千枚と言ふ小田あり撮影に我が来たれる白米棚田は  
猪が出没すると言う畦道を今日は歩み居り相倉に来て  
撮影に今日は来れる相倉に滔々と流れる仙道川を見る  
仙道川の瀬に我は足を浸し居り相倉集落の撮影を終へて  
真向ひに小富士山あり傾斜鋭き白米棚田を幾枚も撮る  
越中にあり鉢伏山にて幾枚も今日は撮りたり砺波の家並み  
撮影に来ぬ高鷲より見上げ居り傾斜鋭き正ヶ洞棚田を  
長良川の源と言ふを思ひ出して我は見上げる大日ヶ岳

## 猛暑日

名古屋 近藤 映子

一本のホウズキ購ひ挿す花瓶七つの朱実の先迄並ぶ

長月に入りても続くこの猛暑夕立一雨のぞみて空見ぬ

夏風邪を引きたる吾が受話機取る映子さんねと友は念押す

葉月より長月と成りても猛暑の続く夫を訪ぬるバス停暑し

暑くとも出掛けて行って夫の手を握り会ふ時安心の時

久しぶり秋雨の朝に窓開くベランダに二匹の亀の動きぬ

朝目覚め病室の夫の浮び来ぬ毎日同じ思ひをしつつ

彼岸来ぬ猛暑はまだまだ今日も又歩けば汗の流るる

夫のもとに向ひ歩きぬまぶしき夕陽手傘かざして速足に

雷の音に目覚めしお中日夫を見舞ひし午后には雨止む

## 仲良し

新城 半田うめ子

味のよく敬老会の食品を頂きし吾は幸ひなりけり

連れられてやさしき孫に敬老会終りてよりのみかわ温泉

葛の花咲きてゐるなり川辺にて数多に咲きしを樂しみて見る

赤々と数多に咲きて彼岸花切られてしまひあわれなりけり

赤々と咲きてゐたりし彼岸花何ゆへ切りしかわが散歩道

金谷にて拾ひし子猫老猫の末子と仲よくまずは安心

虫の引く数多の古米蒔き散らす喜びて食む寄り会ひて鳩

山鳩の数羽の中にて白鳩の一羽ゐるなり仲良しなりぬ

ただ一つ無念に思ひぬ約束の北海道へ行く気持ちのうせたり

庭中の大木の中鳩の鳴く野良猫はしばらく見上げて居りぬ

## 山ゆり

春日井 清澤 範子

娘が通ふ会社は緑の中にして山ゆり咲くを手折りてくれぬ

吾が好む山ゆりの咲くふる里を思ひ出しをり娘に語るも

花瓶に入れ残る三ツの山ゆりの蕾開くを楽しみに待つ

花瓶に活けし山ゆりの蕾は二分咲きに開くを確かめ台所に立つ

吾と同じ薬を飲みて勤めゐる娘を愛しく抱きしめるなり

猛烈な暑さ残れど蝉の声小さくなりて虫の声あり

いつの間にか蝉の声は小さくなり台所に早や鈴虫の声

残暑続く中にも空にうろこ雲秋の一步を感じゐるなり

空に掃くうろこ雲が故里の足助に続く空の広さよ

九月にも猛暑続くも今日見れば金木犀の花芽見えたり

## 今年の名月

島根 金津 文枝

玄関を一步出ずればアスファルトの余熱と反射の酷暑に出会う

程良くて雨降りたり島根辺り畑仕事に喜びをりと

雨降りを待つ庭の樹々涼しくなり自然の日本の恵みに感謝

障子に写る千年杉の影宮下に住み今年の名月

無人屋敷隣の家のアンテナの影を映して今年名月

夕立は止み樹木より雫垂る名月映し無数の光に

宗昌寺の大銀杏台風は大揺れてぎんなんは豆撒く如く境内に

わが夫の十三回忌終へたり本棚より金製の星座表出で来る

運転の三男稲田にて白鷺の首長き美しき姿を知らず

祭日にも郵便夫出勤し親しき仲に年賀状の約束をする

町歩き

豊橋 伊与田広子

日中は三五度の暑さなり何時まで続く彼岸に入るも

冷房を今日は付けずに過ごすなり彼岸も過ぎて吹く風涼し

雨上がり久しぶりにて町歩くすぎ行くバスを見送りながら

今年こんねんは猛暑続きの夏にして秋になりしも体調優れず

癌予防食物選び体温を上げるようにと注意しをりぬ

亡くなりし彼も猫好き白き猫一匹飼つてゐるとわれに云ふ

今雷らいと大雨降りていると云ふ千葉県降るもわが町照りて

残されし妻の悲しみ慰めむ下手なわれの短歌贈るなり

猫の歌われは贈りて待ちをりぬ猫を俳句に如何に読みしか

猫と云へば自分のことと思ふのか云った客の顔じつと見つめし

## ひとつつ消えゆく

蒲郡 杉浦恵美子

延々と表彰続く始業式拍手の音も疎らになり行く

体育館残暑どころか蒸し風呂の暑さよ今日より二学期開始

今の子は辛抱できぬ始業式の長さに耐えず地団駄踏んでる

百貨店母と来しこと幾たびか思ひ出のよすがひとつ消えゆく

三年になれば生徒等頼もしく私はテントをうろろしてゐる

雨の後この青空よ秋来たる我の最後の体育祭の

組の子の長縄跳びを見上ぐれば自衛隊機二機低く上空

陰口に恵美子と呼び捨ててこの子等よ高三生は生意気盛り

今日もまた言ひて仕舞ひぬ我が小言自分の頭で考へなさい

君達は素直なんだよそれはよいされどもひとつ覇気がない

## 鶏頭

豊川 堀川 勝子

育苗中の苺の根元をジグザクに走る道あり土竜の躡

炎天の日除け遣り水はげむほど苺の根元に土竜は太る

里芋の広葉に巣くふ夜盗蛾は並べる苺の畝には行かず

鶏頭の十四五本もありぬべし此処の媼に久しく会はず

人住まぬ庭に咲きゐし鶏頭に秋の日の色極まりにけり

鶏頭のくれなる深き花群の影残しつつ日の暮れ早し

午後よりは雨と言へども夕映ゑて本宮山には虹かかり見ゆ

音羽川の堰のガードに絡みつつ花軸短かき葛咲き初むる

再びは聞けぬジャカルタ日本人学校JJS校歌懐かしき會て二年を其処に暮らしつ

頼れぬと思ひながらも拵げ見る遙か昔のジャカルタの地図

## 炎となりて

豊川 平松 裕子

薄き濃き空に広がる雲の間を月は静かに移ろひにけり

紅の芙蓉の花と水引と飾れる茶室に客として入る

杓の底に溜りて落つるひと滴しばし黙しぬ我が師も我も

香合かと問へばかそかに笑ひ給ふ小さき南瓜の今日の床飾り

火の中に真竹の爆ずる音のして我が山峡の里に響きぬ

草も木も太き真竹もみな燃しぬ炎となりてみな片づきぬ

燃すといふは跡形もなく片づきぬ哀しみは無しまた清々し

何もかも燃してしまはむ時折は真竹の爆ぜる音におののく

お隣の屋根を越えゆく白煙風の流れよ早く変はれよ

いつしかに真暗き夜となりてをり燃し足らぬ思ひの残れるままに

「みちらしい」

豊川 小野可南子

夕づける庭に打ち水する我のあとさきとなり黄揚羽ひとつ

夜の空の祭り花火の満開に飛ぶ飛行機を案ずる佑真

早生米の黄金なみうつ田の道を今日退院の夫と連れだつ

朝の日にきらりきらめく一すぢは蜘蛛にはあらず蓑虫の糸

田の畦に若きみどりのつくつくと彼岸花のまつ赤も近い

さればとて今夜十四日のこの月を明日あしたの夜は雨降るといふ

遮る雲ひとひらもなし此の宵の透る月光かげわれに射しくる

久しくも聞かず使はず「みちらしい」亡き姑の褒め言葉なりき

青く澄む空の広らにとほりゆく一羽の百舌の囀りつづく

絹雲のたなびく空にとほりゆく一羽の百舌の高鳴く声の

## 芽生え

豊川 山口千恵子

入口の扉は黒き大扉指先にて開く田原博物館

冊子など綴ぢたまひたるか千枚通し民平展のガラスケースに

やうやくにやはらかき風出できたり夕べの空は濃き茜色

点々と二葉となりて芽生えたり旱天のもとに青首大根は

この夏の火照りし大地冷やすごと夕より激しく雨降り出だす

降り出だす雨に漂ふ地のにほひ旱の庭のうるほひゆかむ

畑仕事常に励みたまひたり指太かりしかのわが母の手

五俵入の米収納缶も廃品に出だして広し納屋を掃き出す

わが腕に止まれる小さき蚊を打ちぬ壮快感の一瞬はしる

地を裂きて尖れる蕾見えきたり庭石の脇にリコリス今年も

片男波

豊川 夏目勝弘

都より万葉人は四日余り我は四時間玉津島山

若の浦に思ひをはすは万葉時代救急車きたりてうつつに戻る

家包につつみゆきたしと都人我はデジカメに玉津島山

妹背山五分たらずにて頂に潮引きし州に鳥らまだ来ず

若の浦の干潟に来しは鶴タヌならず黒鳥カラスが群れつつ降りる

片男波に並ぶフリーマーケットの前をすぎ万葉歌碑の静かなる道

満つ湖に干潟飛びたつ白鳥は葦辺に向かはず松の林に

ジパンダの手帳を見せて無料なり万葉館にて汗ひくをまつ

和歌川に湖満ち止まる名草山鏡なす水面におだしき山容

干潟また満つ湖を見て片男波いざ帰りなむ一夜の宿に

「招待」

上昇気流

東京 秋山逸穂

昨夜来雨ふりやまず河原のたまりの水には暗き色増す  
霧雨のまだら模様を生む風はビル林立のあい間吹き抜く  
乾きたる畑の土の粒子より雨待つ声が聞こゆるようだ  
谷底の上昇気流にはこばれて白き綿毛は散らばりゆけり  
幼児より小さな磯蟹逃げまどいかくる穴にたどりつきたり

スモツグ

東京 井村喬泉

乗車拒否さるるが常と心得て異国の道に片手を挙げる  
スモツグに満ちたる空の真下には十三億の生業がある  
五つ星ホテルの部屋より見下ろせる路地には痩せし犬がさまよふ  
道ばたにゴミをたらふく食はされし鉄製の箱くたびれて立つ  
水害に遭ひし日本車並べられスモツグ混じる天日に干さる

## 私の一首

吾が父は苦しむ人へ米やむぎ渡しても金は貰ふ事のなし

半田うめ子

幼き日を思い出し、広きなる田も畑も作り居りて働ける幸せと言いつつ、知らない人が立ち寄って昨日も今日も食べる物が無いと言う人に、父は多くの食品を渡しました。お金はいりませんと言ひつつ、尊敬出来る父親でした。

今年また葉の出でて来しミニ蓮に花芽は見えず今日の店閉づ

平松裕子

今年は特別に暑い夏でした。まだまだその暑さは続いています。私のガレージ店舗は見た目だけでも暑いと思われるのか常にも増してお客様は見えません。常滑焼きの筒形の少しゆがんだ水鉢の中のミニ蓮は、暑苦しい店に少しでも涼感をと一昨年植えたものです。植えた年は二花ばかり可憐な花が咲いたのですが、昨年も今年も葉だけは伸びるのですが花は付きません。お客様の見えない店同様寂しいものです。

新緑の葉かげに楚楚とほの白し我が庭桜のおしまひの花

堀川勝子

桜の花はいつの時も麗しく咲き、そして豪勢な散り際を見せて去りゆく。そのあと初々しい若葉が兆し光を返す新緑へと季節は移ってゆく。四月のある日、ふと見上げた庭の葉桜のかげに咲き遅れた一花が可憐に咲いていて何故か強く心惹かれその時の一首です。ごく最近先生の「続々御津磯夫歌集」を読み返していた時のことです。「咲きはじめの一花はよし散りのこる嫩葉のかげの一花もよし」に出合い感激ひとしおです。

贈呈誌 九月号

「冬雷」

木村 普 侯

まろやかに心足りゆくさやさやと十葉乾く水無月の風

「秋田アララギ」

大友 順 子

「柵」

石川 一 成

色かたち好みおのおのことなりて家族らの靴華やぎ並ぶ

昇る陽に白き波の穂輝きて長きわが影汀にとどく

「愛媛アララギ」

徳 本 タ エ 子

「群山」

菊 地 ト ミ

つゆ近く夕べを急ぐ人波に歩幅あはせて地下街をゆく

両手ひろげ降って来たなと空仰ぎ鎌を担ぎて急ぎ帰りぬ

「鹿児島アララギ」

益 山 苜 子

「檜の木」

田 中 と き

この夏は子ら帰り来ず盆の夜をひとり門辺に迎へ火を焚く

放置せし蜜柑畑の草むらにきりぎりす鳴く梅雨の晴れ間に

「高知アララギ」

廣 田 道 恵

「穂の原」

松 井 花 子

少しずつ網戸を洗う広き家全部洗うは無理かも知れぬ

ここかしこ狭庭に咲きつぐ高砂百合猛暑のさ中清しやすらく

「滋賀アララギ」

佐 本 三 恵 子

田 中 浄 子

綾取りの少女の手にて山となり川となりゆく赤き毛糸が

秋あかね我を囲みて乱れ飛ぶしばし眺むる今朝の茄子畑

「灯」

宮 崎 敏 恵

中 井 美 恵 子

時折は羽根を休めし蜻蛉ありバラの切先尖りしところ

庭隅のこぶしの幹に蟬あまたようこそようこそ吾家の庭へ

『いじよせ』 西浦公民館(いーはとぶ)

三ヶ根の峰より涼風吹きてくる夏もやうやく去りてゆくのか

鈴木美耶子

盆施餓鬼に来たる御寺の磚の道すみにま白くサギ草の花

吉見幸子

三度目の松葉杖なるわが暮し畳の上を今日も杖つく

牧原正枝

空の青雲の形の段々と変はりつつゆくまた流れつつ

岩瀬信子

物置にはこりまみれに積まれをり子等の使ひしあの椅子この椅子

三田美奈子

白百合を手折りてガラスの瓶にさす母若き頃のやさしさにも似て

稲吉友江

西日受け子供神輿の帰りくる負はれて眠る子も混りゐて

鈴木つや子

二つ三つ燕の殻の落ちゐたる小さき命の生れしか朝あした

鈴木つや子

音羽川の浅瀬にてたつ小サギらの哀れとも見ゆか細き足を

白井信昭

心地よき秋分の日の朝曇り平和なような穏やかな海

白井信昭

戦いは攻撃こそが最大の防御なりと何故か実らず

伊藤忠男

守り勝つ地味な戦い目指すとぞ試合に勝ちて齒がゆさ残る

伊藤忠男

# 和歌から派生した季語の本意（その四）

「笹」同人 佐藤喜仙

## 9. 時雨（夕時雨・片時雨・時雨雲）

時雨は初冬に急に雨雲が走り、しばらくの間ばらばらと雨が降って、さつとあがる現象のことである。原因は北風が強く吹き、山に当って降雨を起した残りの水蒸気が、山を越えて平地に雨を落すのである。従がって時雨は山が近い奈良盆地や京都に多く、山が遠い関東平野では少ない。時には晩秋に時雨が降ることもあり、これは「秋時雨」として季語になっている。

「みむろ 山秋の時雨にそめかへて霜がれのこる木々の下草」

順徳院（統拾遺集）

時雨はその性質から、人の世のはかなさを託す、かつこうの季題として多くの歌が詠まれた。

「神無月ふりみならずみ定めなき時雨ぞ冬のはじめなりける」

詠人知らず（後撰集）

「世にふるは苦しきものを横よこの家にやすくも過ぐる初時雨かな」

二条院讃岐（新古今集）

例句

世にふるもさらに時雨の宿りかな  
しぐれふるみちのくに大き仏あり  
チエホフを読むやしぐるる河明り

宗 祇  
秋 櫻子  
澄 雄

## 10 枯野

枯野は文字通り草枯れ、虫の音絶えて蕭条たる冬の野である。「冬枯の野辺とわが身を思ひせば燃えても春を待たましものを」

伊勢（古今集）

「朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯れ野の薄形見にぞ見る」

西行（新古今集）

例句

行々でこころ残る、かれ野かな  
おほわたへ座うつしたり枯野星  
枯野行く刻々と沈む日が標

太 祇

誓 子

湘 子

## 11 千鳥（浜千鳥・夕千鳥）

千鳥は水辺の鳥で身体は小ぶりで嘴が短く、羽根の色は地味な灰褐色をしている。

「淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしのに古へ思ほゆ」

柿本人麻呂（萬葉集）

「思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風さむみ千鳥鳴くなり」

紀貫之（拾遺集）

これらの歌の印象が影響して、千鳥の季語は冬の寒さや侘びしさが本意となっている。

例句

汐波や千鳥残して帰る海人  
あちこちに分かる、水や村千鳥  
若き魚夫の口笛 千鳥従がへて

鬼 貫  
荷 風  
三 鬼

「俳句」

ひととせのいのちの力蝉しぐれ

植村公女

腕相撲手首かえすや秋の天

秋天のはじっこらしき子猫鳴く

新涼や影やわらかくなりにつけり

一石

秋光や八分前の陽の姿

知を求め一人歩かむ秋の暮

緑陰の水面に江戸の匂ひかな

佐藤喜仙

泉水に日の子散らせる穂草かな

かなかなの声せつせつと木曾路にて

雨あがり栗の毬のキラキラと

皓一

花々は咲き枯れてゆく秋思かな

色あせる萎える溶けゆく彼岸花

## 物理学者と詩歌の世界 (10)

一石

ヴェルナー・ハイゼンベルク(1901-1976)は、ドイツの理論物理学者。ドイツ南部のビュルツブルクに生まれる。ミュンヘン大学のA・ゾンマーフェルトに学び、ゲッティンゲン大学のM・ボルトンの下で助手を務めた後、1924年にコペンハーゲンのN・ボーアの下に留学(参考資料1)。

20世紀初頭、物理学は新しい物理学の誕生に向けて胎動を始めていた。その旗手がA・アインシュタインであり、N・ボーアであった。

(このことは前号の「物理学者と詩歌の世界(9)」でも紹介した。)コペンハーゲンにはボーアが先鞭をつけた原子物理学(「前期量子論」)の理論を完成すべく当時の最も優秀な物理学者が集まっていた。その中にいて弱冠24歳のハイゼンベルクが1925年に行列力学を、1927年には不確定性原理(注1)を導いて、量子力学の確立に大きく寄与した。この功績により、1932年にノーベル物理学賞を受賞。その後も、現代物理学の諸分野において数々の優れた業績を挙げた。

第二次世界大戦は、物理学者の世界にも大きな暗雲となつてのしかかり、ボーアとハイゼンベルクの師弟関係にも暗い影を残した。ドイツではナチス・ドイツの台頭で同僚の多くがドイツを去ったが、ハイゼンベルクは残り、場の量子論や原子核構造理論の研究を進めた。連

合国側では「ナチス・ドイツが先に原爆を開発したらたいへんだ」という焦りから、全米から多くの物理学者たちがオッペンハイマー指導下の原爆開発の「マンハッタン計画」に参加した(参考資料2)。ドイツにハイゼンベルクがいることが彼らの最も危惧したことであった(参考資料3)。ハイゼンベルクは令状によつて招集され、ドイツの原爆開発チーム「ウラン・クラブ」に参画した。終戦後の検証によれば、ハイゼンベルクは原爆開発にはむしろ消極的であり、意図的に遅延させた疑いさえあった。彼自身「ウラン・クラブ」との関わりは精神的に苦痛だったと書いている。

戦後は、1946年から1970年までマックス・プランク研究所の所長を務めた。

物理的思考と詩想との交感については、ハイゼンベルクも「科学的思考にはつねに詩のエレメントが存在する」と言つたアインシュタインの言葉(参考資料4)と同様、「物理は窮極的には詩のようなものでしか表現できないのではなからうか」との示唆に富む言葉を残している(参考資料5)。

量子力学の誕生期に活躍した物理学者の多くは哲学や芸術など人文主義的教養を身につけていた。東洋哲学にも造詣が深く、ボーアは「相補性原理」との関連で陰陽道に、またシュレーディンガーはヒンドウ教のヴェーダーンタ哲学に興味を有した。ハイゼンベルクはインドの詩人ラビンドラナート・タゴールとの対談から、東洋哲学の内容が量子力学の真髄に通じていることを理解し驚いたと言われる。

著作には『自然科学的世界像』、『現代物理学の思想』、『現代物理学の自然像』、『部分と全体 私の生涯の偉大な出会いと対話』(以上、いずれも邦訳出版はみせず書房)など多数ある。

ハイゼンベルクの残した言葉を以下にいくつか紹介する(参考資料6など)。

○「物理は窮極的には詩のようなものでしか表現できないのではなからうか。」

彼の思想を、ある人は「自然科学者のポエジー(詩)」と呼んでいる。彼の画期的な物理学の功績は、この「詩心」が紡ぎ出した見事なるタペストリー(つづれ織り)にはかならない。

○「私は、ゾンマーフェルトからは楽観主義を、ゲッティンゲンからは数学を、ボーアからは物理学を学んだ。」

○「われわれが観測しているのは自然そのものではなく、われわれの探求方法に映し出された自然の姿だ。」

○「異なる思想の流れが出会うところ、人類の思想上もつとも実り多い発展がある。」

○「過去数十年の間に、日本の物理学者たちが物理学の発展に対して大きな貢献してきたのは、東洋の哲学的伝統と『量子力学』が根本的に似ているからなのかもしれません。」

注1…この不確定性原理によれば、「原子を構成する粒子の位置と速度を同時に知ることはできない」。これは因果律に従い完璧に予測されるものだと考えられていた世界が、偶然と確率と可能性に支配された不確定なものになると主張するものでニュートンカ学の世界観を大きく書き換えた革新的な概念であった。

### 参考資料

1) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

2) 藤永茂『ロバート・オッペンハイマー 愚者としての科学者』、朝日新聞社

3) トマス・パワーズ『なぜナチスは原爆製造に失敗したか 連合国が最も恐れた男・天才ハイゼンベルクの闘い』、ベネッセコーポレーション

4) 三河アララギ、第57巻第4号(2010)、「物理学者と詩歌の世界」(3)

5) 三河アララギ、第57巻第5号(2010)、「物理学者と詩歌の世界」(4)

6) W・ハイゼンベルク『部分と全体 私の生涯の偉大な出会いと対話』、みせず書房

## 鎌田敬止という人（四十七）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（9）〉

昭和二十四年一月二十四日付の手紙に鎌田は、「ロダンも近く校正が出はじめる予定です。写真は土方さんのお骨折で一応揃ったさうです。近日常に御覧にお入れすることができると思ひます。お待ち願ひます。後記よろしく願ひいたします」と書き、いよいよ校正が始まることを伝えている。こうして、岩手と東京に住む二人の頻繁なやりとりの果てに、ついに「ロダン」は大詰めを迎える。光太郎は、鎌田に、

写真版御申越通り十六枚選定、題名と番号とをつけました。「後記」も四枚ばかりの短いものを書きました故一緒に書留小包で写真版印刷画二十枚御返却分とお送りします。装幀は御随意にやつて下さつて結構です。カバーでせうか、函でせうか。

（昭和二十四年三月十七日付）

と書いている。

光太郎が書いた『ロダン』の「後記」は次の通りである。

この書は昭和二年、アルス社から伝記叢書の一冊として出版された「ロダン」を白玉書房が同社の承諾を得て今度重版したものである。本文に増減は無いが、前版にあつた文字の誤を訂正したり、本文以外の不用の数字を削除したりした。（中略）

この書の重版に当つては遠隔の地に在る私のこととて、一切の用務は白玉書房主人鎌田敬止氏の勞を煩はし、又写真版のことについては土方定一氏の厚意を辱うした。おかげでこんな山の中に居ながら斯ういふ本が出せる。

一九四九年三月 陸中稗貫太田村にて

原稿が揃つてゆくと同時に校正も順調に進んでいる。鎌田は光太郎に手紙で最後の細部の事項を報告したり、頼んだりしている。

○ロダンの本文は校了、来月半ば頃には紙が買へます。（中略）見本の切れはし封入してお目にかけます。（中略）それで早速装釘を決めなければなりません、お考へ願へないでせうか。○表紙の金版にする文字はもうおできになりませうか。○表紙の意匠○函の意匠○本扉○見返の色など急いでお決め下さいませんかしら。

（昭和二十四年六月二日付）

こう書き、この封書には「ロダン本文紙見本」を封入している。し

かし、作業は予定通りには進まず、発行は遅れてゆく。この年十二月に鎌田は次のように書き送っている。

この秋は智恵子抄の新版を出版させていただきロダンも発売したいと願つてゐましたがどちらもダメになり残念でした。夏あたりにお伺ひできたらかつたのではなかつたかと矢張り心残りに思はれてなりません。ロダンは本文は勿論、図版も全部製版完了して居ります。装釘をいただいたら一気に印刷製本にかかれます。(中略) ロダンは美術シーズンに出せたら一層よかつたでせうが、あれだけの名著ですからあながち美術シーズンに出なくても差支へないと思ひます。

(昭和二十四年十二月一日付)

作業の遅れの要因は完璧を期する光太郎の側にあつた。右に「智恵子抄の新版」とあることについては別章で詳述する。鎌田はこの十九日にも「ロダンは三月発売にいたしたうございますから装釘をなるべくお早くお願いいたします。」と催促している。装丁が決まればできあがりというところまできて、しかし、「ロダン」はどうとう発行されなかつた。このあたりの事情はいまつまびらかにできない。

「ロダン」と同じころに企画されて白玉書房から出版された『天上の炎』(ヴェルハーレン詩集)について触れておきたい。この本の企画時期に関する手紙が残されている。光太郎は宮崎稔宛に、「十二月九日に鎌田敬止さんが雪の中をやつて来られました。(中略) 出版の

事についてでしたが、『天上の炎』も其時出版したいといふことでしたから、若し十字屋さんと宮崎さんとの間に『天上の炎』出版のとりきめが無かつたら璞書房(鎌田さんの出版所)で出しても差支へない旨返事しました。(中略) 其後鎌田さんからもテガミがあり、その取極めが無事が判明したので、璞書房から出版したいと申越されました。」(昭和二十一年十二月二十六日付)と書いている。光太郎の、宮崎稔へのひと言がなかつたら『天上の炎』の話が十字屋に行つてしまいかねないタイミングであつた。鎌田が光太郎を訪問したことは鎌田の、光太郎宛の次の書簡によつてもわかる。

拝啓 先日は突然お伺ひいたし並々ならぬ御芳情にあづかり誠に忝く厚く御礼申し上げます。(中略) 十字屋の方のは、詩は仏蘭西詩集の正統に載つた「午後の時」一篇だけの予定だつたさうでして、幸ひ「天上の炎」とも「明るい時」ともぶつかつてありませんでした。これ亦非常な好都合でありました。先づ「天上の炎」を璞書房第一出版に致したく筆写の出来次第組版に廻すことにします。(中略) ○真壁さん御所持のエルハアランの訳詩集(未刊)も璞書房に出版お許しいただけたらと思ひますが、もしおよろしかつたら御住所をお知らせ頂きたいと存じます。いろいろ欲張つて恐縮ですが先生の御本に関する限りどんなに食欲になつてもなり足りぬ気持でありますから、御同情願ひます。

(昭和二十一年十二月二十三日付)

# 萬葉一葉 (321)

今泉忠芳

## 磐姫その二十四 四首

### 磐姫皇后思天皇御作歌四首

君之行 氣長成奴 山多都祢 迎加將行 待尔可將待 (85)

如此許 戀乍不有者 高山之 磐根四卷手 死奈麻死物呼 (86)

在管裳 君乎者將待 打靡 吾黒髮尔 霜乃置万代日 (87)

秋田之 穂上尔霜相 朝霞 何時邊乃方二我戀將息 (88)

### 或本歌曰

居明而 君乎者將待 奴婆球能 吾黒髮尔 霜者零騰文 (89)

### 磐姫皇后、天皇を思ひたてまつる御作歌四首

君が行き 日長くなりぬ 山たづね 迎へか行かむ 待ちにか 待たむ

かくばかり 恋ひつつあらずは 高山の 磐根し枕きて 死なましものを

ありつつも 君をば待たむ 打ち靡く わが黒髮に 霜の置くまでに

秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 何処邊の方に わが恋ひ止まむ

### 或る本の歌に曰はく

居明して 君をば待たむ ぬばたまの わが黒髮に 霜はふれども

萬葉卷第二の巻頭は磐姫皇后の 天皇を思ひて御作歌四首である。

### 第一首・君之行

あなたの旅は日が経ちました。山を訪ねて迎へに行きましようか、  
待って居ましようか。

「待つにか待たむ」に切迫した心情が表われている。

### 第二首・如此許

このように恋しているのだから高山の岩に伏して死んだ方がまし  
でしょう。

「死なましものを」恋の切実な心情の極度の表現であろう。

### 第三首・在管裳

このまゝ、あなたをお待ちします。打なびくぬばたまの私の黒髮に霜  
が置くまでに。

「ありつつも」ずっとずっと生きている限りという気持である。「打  
ち靡く」黒髮ばかりでなく心の姿も込められている。

### 第四首・秋田之

秋の田の稲穂の上にかかっている朝霞が、どちらの方にゆくにしてい  
ても、消えてしまっても私の恋は止むことがありません。

「我戀將息」息の字が使われている。息の字は生きている限りとい  
う気持を当字にしている。

「將息」を消えてゆくという解釈もあるがここでは反語ととりたいた。  
磐姫皇后の四首は萬葉集の中の最も古い歌である。また、最も美し  
い歌である。萬葉集中のみならず、歌の歴史すべての中で最も美しい歌  
である。

### 或本歌曰

寝ずに夜を明してあなたをお待ちしています。私の黒髮に霜が降り  
ていますけれども。

在管裳の方が居明而より歌として優れている。口承による異伝が或  
本歌となったものであろう。

# 「氷魚」のことから (118) 岡本八千代

残暑に負けつつ暮しているうちに糸瓜忌も過ぎてしまった。——今日は何処かから群雲が流れてきて、また海の方へ動いてゆく。

今回は、子規の小説「銀世界」を読解してみたいと思う。

子規は、「銀世界緒言」(子規全集13巻25頁)に「今茲(こゝ)一月学暇を得て故郷に還る 勿ち銀世界といふ題にて短篇をものせんと思ひ筆をとりしに脚色を仕組む能はず、かれかこれかと思へども皆心に満足せず終(つひ)にせんすべなくて、趣向のよしあしを問はず思ひつくまに(く)書き綴りぬ、以下略」と書いている。

それは、「明治二十三年一月、故さとの書窓、水を聴く処にて沐猴冠者 識」とあつて、子規らしいユーモアのあるペンネームが記してある。「沐」は身を洗う、「猴」は猿のこと、「冠者」は、かんじやともかじやとも読み、未だ無冠の若者とでもいうのか。作者を(子規を)かく記しておもしろい。

さて、内容は、まず、

## ○銀世界 第一

登場人物：甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・丑・寅・卯・辰・己・午・未・甲・酉・亥の干支の名前の人物が、見物人として出てくる。そして、それらの人に口上する人・木戸番がいる。

そこで、ふじ山形の看根に「銀世界」と書いてある小屋にみんなが集まる。

つまり、「銀世界」という題名で幻燈を廻らすことからはじまる。そして、雪見の姿を映す。それを見物人に観させて、甲・乙……のみなみなに、雪にまつわるそれぞれの思いを言う。それに口上が答えて言う。——「銀世界」とはつまり、雪の姿のことであった。

## ○銀世界 第二

第一回——書き出し、「春風吹き渡りて百花色を競ふ」——「ああ花か

雪か 雪か花か」——「花の姿の美男美女」と。

第二回——書き出し、「霏々として空に舞ひ毳然として枝より落つ。

顔れか、りし古寺もけふは昔の玉の台にかへり、まだ咲きあ

へぬ梅の木も去年の魂を反す。——」一人の老翁と一人の

老嬢が上野の森を若い頃のことを話しながら歩いている。「時

も昔の春ならず我身ももとの身ならねば」と打ちしめりたるか

こち言「昨日の遊びには花を見て雪と疑ひ……大の一生は一年

の時候の如し……頭も雪の老翁・老婆」(P 38)……と。

第三回——一つの小さい軽気球に「われ」は移り乗ったこと。——下

りてみると、そこには草木も金銀、まるで蓬莱宮へ来たのかと

思うほど。そこで、一人の女と余(われ)と会話。銀世界の乙

女との出会いの不思議さが書かれている。(つづく)

## ことのはスケッチ(383) 今泉由利

### 『命』

息をするのも辛いほど暑い日だった。宮益坂をのぼってゆく。

上映阻止とか：上映反対のデモに入館を拒まれるとか：噂のあるドキュメンタリー映画、ルイ・シホヨス監督の「ザ・コープ」を観るため。見ないで過ぎてしまった方が楽、とも思うけれど、「命」のことを気にしているのだから、見ないまま、知らないふりは、卑怯だと思う。しっかり見て、自分なりの判断をして、そして生きていきたい。

心配していた映画館には、何事もなく入館出来、十二〜十三人の観客で神妙に映画は始まった。

「日本伝統文化」という、和歌山県大地町でのイルカ追い込み漁。

美しい天然の入江に、イルカを追い込み、とても沢山のイルカを、逃がられない状態にして、そして殴り殺す。命あるものではないかのように。

命として逃げまどうイルカ、死に直面するパニック、死にきれないで喘ぐ苦しみ。大量のイルカの血は、入江からあふれ、海へと流れだす。その血の量のすぎまじさ。

部外者が近寄れない囲いを巡らし、その中での内密の「日本の伝統文化」。

知る限りの友人に「イルカを食べる」ということを聞いてみた。「嘘

でしょ」「あんなに可愛くて利口で：」「イルカを食べるわけないよ」「わんぱくフリッパー」見て育った」。

大変な数のイルカを殺すのだから、何知らぬまま「食べてしまっている」形式になっているのかもしれない。

一三七億年前のビッグバンより今に至る宇宙のなりたちのその地球の生命のはじまり、地球環境の変化に、出現し：絶滅し：それに耐え進化し：。すべての生物は、自分と同じ命として繋がっていることを思う。サメ、サンマ、メダカ、カエル、ヘビ、トカゲ：もちろん動物達：。人間も連なり、すべての脊椎動物の脳は、魚類から哺乳類まで基本的な構造は同じであるという。

次世代に繋ぐ命、恐ろしく感じる命、苦痛、痛み、死にたくない命。：。どんなに小さな命も、自分と同じ痛みを感じる命であることに敏感であるべきだと思う。

命に対する礼儀をわきまえ、謙虚にいたい思いを新たにした。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山 西行法師

西行法師を追い、松尾芭蕉は

命なりわづかの笠の下涼み

芭蕉

太古より続いてきた命の続き、私の命でもって先達の思いを馳せる。

## 和菓子街道 (49)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

昔は沼地が多く「池鯉鮒」とも書かれた知立。杜若の名勝地・三河八橋で古くから知られ、在原業平が「かきつばた」を詠み込んだ歌「からころも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞおもふ」はあまりにも有名だ。

知立の名物といえば「大あんまき」。元祖の小松屋は元々、街道筋の茶店で、「二つ折り」なる菓子を出していたそう。その名の通り、焼いた小麦粉生地を二つに折り重ねた菓子で、いわば和製パンケーキ。明治22年(1889)、これに餡を挟んだところ評判になった。餡を入れて巻いたので「あんまき」。実に分かりやすい。「うちでは元々“あんまき”。そんなに大きくもありませんしね(笑)」とは、五代目の若女将の談。今も機械や型は一切使わない手作りの



あんまきは、表面がパリっとして、中はもっちり。このあんまきに出会って以来、私の中では「名物にうまいものあり」が常識だ。

## お知らせ

▽編集会は、十一月十四日(第二日曜日)に発行所にて行う。

▽十二月号原稿は、十一月一日(月)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不要です。

## 歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一一四・〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰め(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集後記

昨日は久々の雨でした。この地方もかなりの降雨量だったようですが、今日、十月十日は一転して空の高い秋空になりました。

発行所の庭にも今年は少し遅目の彼岸花が咲き揃い、紅萩が枝垂れ肩に触れるばかりです。昨日NHKテレビで「日本列島・奇跡の森」を放映していました。日本の紅葉は世界中でも最も美しいと感動的に伝えていました。

私たちが愛する短歌も、紅葉はもちろん、四季の移ろいを肌で感じられるこの日本の風土の上に培われた文学です。さあ、紅葉の季節到来です。締め切り日に追われる歌作りではなく、ゆとりを持って、目で見、肌で感じて歌を詠みましよう。これはいつも締め切り真近に慌てて歌を作っている私自身への戒めでもあります。

(平松)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分三万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二万円、一ヶ年分四万円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができます。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十二年十月二十五日印刷 第五十七巻 第十一号  
平成二十二年十一月一日発行 定価 六百元

### 編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘  
平松 裕子・山口千恵子

### 発行人 発行所

今泉 由利  
三河アララギ会  
三河アララギ発行所 〒四四一・〇三二一

### URL

豊川市御津町御馬 西三七  
TEL (〇五三三)七五・二〇〇九  
振替口座 〇八三〇・六一五・三二九  
E-mail yur88@cnos.ocn.ne.jp/  
Homepage <http://maizunyu.jp/>

### 印刷所

株式会社 桜創美